資料紹介

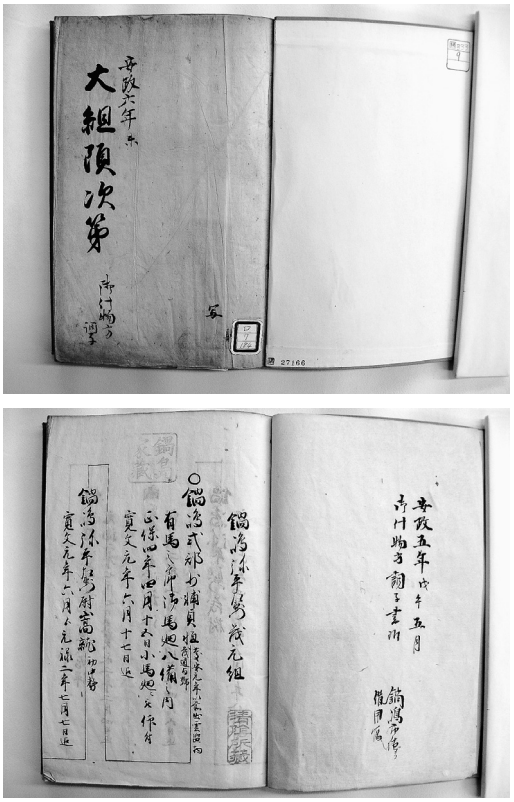
『大組頭次第』にみる明暦期～慶応期の大組編制について

中野正裕

一、はじめに

『大組頭次第』（鍋３３３／９）は、鍋島家文庫（鍋島報效会所蔵、佐賀県立図書館寄託）の資料である。形態は、タテ１９・２㌢、ヨコ２７・１㌢の冊子である。丁数は七十九丁あり、状態は良い。作成年代は安政六年（一八五九）である。

同書名の史料は三組ある。底本はａ『大組頭次第』とし、ｂ・ｃ『大組頭次第』を異本とした。



『大組頭次第』（表紙と冒頭）（「鍋島家文庫」鍋島報效会所蔵　佐賀県立図書館寄託）

ａ安政六年未　写　大組頭次第　　鍋３３３／９　御什物方
ｂ安政六年未　写　大組頭次第　全　鍋３３３／８　堤久之允貞郷
ｃ安政六年未　　大組頭次第　　鍋３３３／７

ａ『大組頭次第』は、安政期までの大組頭を編年に系譜で記されており、「鍋島家蔵」印と「清陰所蔵」印がある（清陰とは鍋島安房茂真所蔵のこと）。

ｂ『大組頭次第』は、慶応期までの大組頭を編年に系譜で記されており、「鍋島家蔵」印とともに「堤蔵書印」の印がある（堤とは堤久之允貞郷所蔵のこと）。「安政六年未二月下旬写」とある。

ｃの書写者名は不明で「鍋島家蔵」の印があるのみである。

ａは冒頭「安政五年戊午五月御什物方調子書付」、「鍋島市佑ヨリ借用写」とあることから安政五年（一八五八）五月に御什物方（御側部局）が調べて書き付けたものを御年寄役（御側役責任者）鍋島市佑から借用して諸役家老鍋島安房が命じて写させたものと思われる。

今回は紙面の都合上、二代藩主鍋島光茂から十一代藩主鍋島直大（明暦元年～明治元年）までの佐賀藩大組編制の変遷図を収載した（光茂以前は『佐賀藩の総合研究』の五六六～五六七頁折込参照）。

なお、①～⑯の番号は、後掲の変遷図に付した番号で底本の掲載順による。⑰以降も、底本の掲載順の番号である。

二、大組編制

a『大組頭次第』（以下本史料）をみると、大組編制が永禄期から安政期までよみとれる（全部で通算三十三組）。記載内容の冒頭は、大組を最後に引き継いだ大組頭名が見出しになっており、個別の記載は、大組頭の創設と引き継ぎの時期と経緯が記され、大組頭名は、姓・諱・通称もしくは官途名・続柄が記され、さらに改名前後の記載もある。

末尾には追記的に鍋島右近茂泰と成冨蔵人安利、朝倉久左衛門尉の組が記されている。鍋島と成冨は、鍋島忠直（勝茂嫡男）、朝倉は高源院（勝茂継室、岡部長盛女）附の侍組で、大組頭ではないことから詳細に調べないと記載がある。大組頭ではない初代藩主勝茂に近い存在の侍組を記している点は興味深い。

底本と異本の相違点は二つある。一つは見出しの大木主計朝温組が異本bに鍋島千之丞組として記されている点である。二つ目は、多久伊織安廣組が異本bでは、岡部李佐組となっている点である。aの底本にこの組は、諸岡彦右衛門茂之→鍋島玄蕃允常貞→相浦源左衛門政乗と引き継がれている〔資料1〕。

しかし異本bには、諸岡彦右衛門茂之の前に関将監清長と関大和守茂範が加筆してあり、鍋島玄蕃允常貞が削除してある〔資料2〕。関組（清長→茂範）については、底本と異本bの七十三丁目に同様の内容が重複して記されている。つまり異本bには、〔資料2〕の記載が二度あらわれる。また、異本bには幕末期に多久伊織安廣組を引き継いだ「岡部李佐組」に「鍋島千之丞崇」と並記してある。

〔資料1〕（底本a伊織組部分⑯）

多久伊織安廣組

○諸岡彦右衛門茂之

寛永十三年十二月五日御書物有之在国組也、同十五年有馬合戦之後、諸与御改正、鍋島玄蕃允常貞・鍋島織部允某組被相寄、正保三年十月迄

鍋島玄蕃允常貞

正保三年十月ヨリ明暦元年六月七日迄

相浦源左衛門尉政乗

明暦元年六月七日より寛文三年迄

〔資料2〕（異本b李佐組部分⑯）

岡部李佐組

○関将監清長

寛永十三年十二月五日御書物馬廻八備之内、同十五年九月廿日迄

同大和守茂範　初左近

寛永十五年九月廿日ヨリ明暦元年三月廿二日迄、正保四年大馬廻被相定

諸岡彦右衛門茂之

相浦源左衛門尉政乗
　明暦元年より在国与ニ被相定、寛文三年月日迄

佐賀藩の大組頭の始まりは、〔資料3〕（以下〔資料13〕までの出典は底本aである）をみると永禄元年（一五五八）から天正十四年（一五八六）迄の二十八年間率いた執行越前種直の大組である。この大組は種直が戦死し、父の後を種貞が引き継いでいる。種貞は小早川隆景と共に朝鮮出兵（「高麗御陣」）した人物である。慶長の中頃にこの組は鍋島生三組に合併する。

〔資料3〕（⑰）
　執行平左衛門尉種貞組
○執行越前守種直
　城原衆三分之組、永禄元年十月ヨリ天正十二年三月廿四日迄、此
　壱組　隆信公御弓箭之節ハ、御先手ニ被相定

同平左衛門尉種貞
　父種直戦死之跡組江上武蔵守家種殿ヨリ無相違被仰付、高麗御陣之
　節ハ壱組小早川隆景殿へ被相付、慶長之中比ニ而平左衛門種直組被
　召上鍋島生三組ニ被相寄

佐賀藩の家臣団編制は、本藩を「与」（大組）といい、本藩の大組頭は家老家・着座家の家柄から任命され、支藩（小城・蓮池・鹿島）・大配分（親類〔白石・川久保・神代・村田〕・親類同格〔多久・武雄・諫早・久保田〕）は「備」として分立している。

ただし、藩政当初は、親類（白石家）・親類同格（多久家）の大配分の家柄も佐賀藩直轄軍として編制されていることが本史料から窺える。

具体例として成冨兵庫助茂安、鍋島山城守直弘（親類、初代勝茂男）〔資料4〕、須古下総信明（影庵、須古家、鍋島茂周父、隆信甥、）〔資料5〕、多久長門安順（親類同格、龍造寺長信男、隆信甥）〔資料6〕・多久図書茂冨（親類同格、後藤家均男、多久安順養子）〔資料7〕といった大配分の家臣が藩政当初は大組頭になっており、これら大配分の家臣は、後に独自の編制となる（＝「備」）。

〔資料4〕（六左衛門組部分⑧）
　深江六左衛門武教組
○成冨兵庫助茂安
　天正十九年　太閤殿下朝鮮御陣被思召立候節、　御当家御軍配被
　相定、十右衛門茂安一与被　相立先手ニ被仰付、筑後・肥後御陣
　後ハ御馬廻ニ被仰付、寛永十年四月朔日迄

同十右衛門長利
　寛永十年四月ヨリ同十五年有馬合戦後迄

同山城守直弘　後賜鍋嶋
　寛永十五年有馬合戦後、　勝茂公従江戸被仰越長利一与直弘ニ被仰
　付、其後御馬廻鹿江茂左衛門尉　手明鑓一隊此与江被相附、寛文元
　年七月七日迄

〔資料5〕（縫殿組部分⑩）

多久縫殿安美組

○須古下総守信明

四家之御親類在、佐嘉御家老職兼帯之儀、慶長十三年也、元和七年諸与御改正有之、然は信明大与頭之儀は、慶長十三年之後ニ而元和七年迄欤

〔資料6〕（⑳）

多久長門安順組

○多久長門守安順

四家之御親類在、佐嘉御家老職を兼候は慶長十三年之事、元和七年十月諸与御改卒、御親類之大物頭相止、然は此組相建候は慶長十三年以後ニメ相止候は元和七年之事欤

〔資料7〕（㉒）

多久図書頭茂冨組

○多久図書頭茂冨

此組相建候年月不詳、但慶長之末ヨリ見る、元和七年十月諸組御改正之節、諸組へ散

次に六家老家（横岳鍋島家・神代鍋島家・深堀鍋島家・姉川鍋島家・倉町鍋島家・太田鍋島家）をみると佐賀藩の側近政治を担った鍋島平五郎茂里（横岳鍋島家）〔資料8〕と鍋島生三道甫（姉川鍋島家）〔資料9〕が大組を編制し、母が初代藩主勝茂の姉である太田弾右衛門尉茂歳（太田鍋島家）〔資料10〕、藩祖直茂の兄にあたる鍋島豊前守信房（神代鍋島家）や茂里の弟である鍋島安芸守茂賢（深堀鍋島家）も大組編制していることがわかる。

〔資料8〕（主水組部分⑥）

鍋島主水茂明組

○鍋島平五郎茂里　後主水佑

天正十九年　太閤殿下朝鮮御征伐被思召立候節、御当家御軍配被相定、鍋島平五郎茂里一組被相立御先手ニ被仰付、以後子孫代々相続、茂里慶長十五年八月八日迄

〔資料9〕（⑱）

鍋島生三道甫組

○鍋島生三道甫

右壱組蓮池衆天正之末　直茂公ヨリ被仰付、高麗之節ハ御馬廻ニ而出陣、慶長之中比執行平左衛門尉種貞城原一組被相寄、元和二年六月八日在国組ニ被相定、寛永五年六月廿七日鍋島九郎兵衛尉茂為死去之節、右一組之城原衆当組へ被相寄、同六年六月朔日生三死、其之後壱組鍋島舎人佑茂利へ被相付

〔資料10〕（㉑）

太田弾右衛門尉茂歳組

○太田弾右衛門尉茂歳

慶長年中御馬廻組被相定、元和元年十一月十八日迄其後不詳

佐賀藩大組の大部分は天正期から寛永期にかけて創設している。藩政初期は、家老家の家柄のなかで倉町鍋島家は大組頭に入っていない。

これは、「一　四月五日、御家の執権鍋島式部少輔貞村病死　行年五拾歳」「此跡子息市正直廣、執権不相替　被仰付候」（「元茂公御年譜」『佐賀県近世史料　第二編　第一巻』収載）とあることから倉町鍋島家の初代当主式部少輔貞村が佐賀藩の支藩である小城藩（勝茂の子元茂が初代）の「執権」、二代当主の市正直廣が「執権」（「附家老」）であったためと考えられる。

十五組が揃うのは、慶安三年（一六五〇）で、十五組は次のようになる。

【慶安三年の大組頭】（身分は慶安期以後も含む）

番号	掲載順の番号	慶安三年の大組頭	家名・身分等
1	①	鍋島式部少輔貞恒	太田鍋島家・家老
2	②	成富左兵衛茂明	
3	③	鍋島縫殿助茂泰	姉川鍋島家・家老
4	④	中野数馬政利	茂利男・着座
5	⑥	鍋島主水武興	横岳鍋島家・家老
6	⑦	鍋島志摩守茂里	深堀鍋島家・家老
7	⑧	鍋島山城守直弘	白石鍋島家・親類
8	⑨	鍋島弥平左衛門尉嵩就	神代鍋島家・家老
9	⑩	有田勘解由紀	有田松浦家・着座
10	⑪	中野内匠助茂利	政利父・着座
11	⑫	大木兵部丞統清	着座
12	⑬	鍋島舎人佐茂利	舎人系鍋島家・着座
13	⑮	石井兵庫助孝成	忠繁系石井家・着座
14	⑯	鍋島玄蕃常貞	千葉家・着座
15	㉙	関大和茂範（直長）	川久保神代家・新類

変遷図に記載した大組の中で最後に編制されたのが明暦元年（一六五五）の鍋島玄蕃允常貞の組である。鍋島常貞は承応元年（一六五二）に鍋島正辰（須古鍋島家）・鍋島武興（横岳鍋島家）と共に連判家老であった人物である。鍋島玄蕃允常貞組は元々寛永十三年（一八三六）十二月五日創設するが島原の乱（「有馬合戦」）後、解体する〔資料11〕。この組は、鍋島織部組と共に諸岡彦右衛門茂之組に吸収される。正保三年十月に再び玄蕃允常貞が諸岡彦右衛門組を引き継ぐ〔資料1〕。

さらにこの組は、明暦元年（一六五五）六月七日に相浦源左衛門尉政乗に引き継がれている。その後、玄蕃允常貞は別に大組編制している。これは関組を引き継いだ組と考えられる〔資料12〕。

〔資料11〕（㉛）

鍋島玄蕃允常貞組

○鍋島玄蕃允常貞

寛永十三年十二月十五日御書物ニ見る、御馬廻八備之内有馬合戦之後、諸組御改正之時諸組へ散

〔資料12〕（又右衛門組部分⑭）

坂部又右衛門明矩組

○鍋島玄蕃允常貞

明暦元年六月七日関大和茂範一組被相止、鍋島六左衛門種世出陣組被仰付候節、在国組一組被相立、種世与手明鑓大形此与ニ被相附候、同三年三月迄

次の表は、変遷図から三人の藩主が就封した時の大組頭を抜粋した表である。この表から家老家・着座家の家柄から大組頭に選ばれ、多くの大組頭が世襲していることが窺える。

【八代治茂・九代斉直・十代直正藩主就封時の大組頭】

番号	変遷図番号	八代藩主治茂就封 明和七年（一七七〇）	九代藩主斉直就封 文化二年（一八〇五）	十代藩主直正就封 天保元年（一八三〇）
1	①	鍋島弥平左衛門茂真（神）	鍋島弥平左衛門茂體（神）	鍋島監物茂矩預（太）
2	②	成富千兵衛重徳	鍋島内膳茂體預（神）	成冨舎人種義
3	③	鍋島弾右衛門茂恒（太）	鍋島弾右衛門茂保（太）	鍋島監物茂矩（太）
4	④	中野数馬敬明	鍋島主税茂徂（姉）	鍋島淡路茂郷（姉）
5	⑥	鍋島主水茂和（横）	鍋島主水茂親（横）	鍋島主水茂延（横）
6	⑦	鍋島七左衛門茂雅（深）	鍋島孫六郎茂辰（深）	鍋島孫六郎茂辰（深）
7	⑧	鍋島隼人道房（伊）	鍋島傳兵衛親房（伊）	岡部杢之助重辰
8	⑨	原田吉右衛門種	鍋島市佑周照（納）	有田八右衛門武
9	⑩	鍋島市正敬充（倉）	鍋島大隅敬文（倉）	鍋島大隅敬文（倉）
10	⑪	鍋島嘉右衛門棟（山）	鍋島十大夫繁（山）	鍋島十大夫栄（山）
11	⑫	成富十右衛門清季	生野図書時奥	鍋島市佑保脩（納）
12	⑬	鍋島左大夫種全（左）	鍋島精記種族（左）	鍋島左大夫種彬（左）
13	⑭	千葉太郎介胤武	執行主計忠尚	大木庄右衛門朝
14	⑮	石井縫殿孝知	石井勘解由孝起	石井左近孝寛
15	⑯	安達藤左衛門忠僚	納冨右膳昭純	生野図書孝親

［家老家…横岳鍋島家＝（横）・神代鍋島家＝（神）・深堀鍋島家＝（深）・姉川鍋島家＝（姉）・倉町鍋島家＝（倉）・太田鍋島家＝（大）、着座家…山代松浦家＝（山）・納富鍋島家＝（納）・鍋島左大夫家＝（左）・伊万里松浦家＝（伊）、以上『佐賀県史中巻』参照］

三、幕末期の大組編制

佐賀藩は、幕末期（元治元年〔一八六四〕）になると大組が十五組から十六組に編制がかわる。

〔資料13〕（⑤）

鍋嶋志摩敬哉組

○鍋嶋志摩敬哉

此組嘉永三年戌十月十五日御火術組と相唱、与々ヨリ組替被　仰付、鍋嶋弥平左衛門茂元・鍋嶋播磨茂快両人預リ与ニ被仰付候処、同六年十一月廿三日鍋嶋志摩敬哉大組頭被　仰付、御側新組と相唱候

〔資料13〕をみると諸段階では、嘉永三年（一八五〇）火術組が創設され、鍋嶋茂元（神代鍋嶋家・家老・直正庶弟）・鍋嶋茂快（太田鍋島家・家老・直正庶弟）の預かりとなり、この組がもととなり同六年（一八五三）に鍋嶋志摩敬哉（倉町鍋島家・家老）が頭人となり、御側新組を設置している［変遷表⑤］。

さらに異本ｂには、志摩組が慶応三年（一八六七）二月四日まで存在していたことがわかり、同年三月二十五日に鍋嶋大隅（文武・直正庶弟・敬哉養子）に引き継がれている。

『幕末伊東次兵衛出張日記』（『佐賀県近世史料　第五編　第一巻』収載）によれば嘉永六年十一月廿三日に「一　志摩殿義、御火術方頭人被仰付候

事」「一　御同人（鍋島敬哉）義、御側新組大組頭被仰付候事」「一　鍋島隼人義、志摩殿元組大組頭被仰付候事」「一　隼人元組小山平五左衛門へ被仰付候事」とあり、鍋島志摩の御側新組創設による大組編制が記されている。鍋島隼人（忠房・着座）が志摩元組を引き継ぎ、隼人元組を小山平五左衛門（龍造寺家庶流、嘉永四年に御年寄）が引き継いでいる。『直正公御年譜地取』（『佐賀県近世史料　第一編　第十一巻』）にも十一月廿三日の記事に同様のことが記されている。

御側新組が創設される前の志摩組は文政十一年（一八二八）に鍋島大隅敬文から鍋島志摩敬哉組に親子で引き継ぎ、嘉永三年（一八五〇）に鍋島隼人忠房組、安政元年（一八五四）に多久縫殿安美組、慶応二年（一八六六）鍋島縫殿助組と変遷していることがわかる［変遷図⑩］。

元治元年（一八六四）は、鍋島隼人忠房組（安政元年に小山平五左衛門より引き継ぐ。小山は隼人組を嘉永六年十一月二十三日から一年程預かる）が鍋島誠吉郎組（弥平左衛門組から監物預となり誠吉郎組に引き継ぐ）に合併する［変遷図②］。鍋島隼人忠房は鍋島千之丞組から元治元年に引き継ぎ、再び大組頭となるが、翌年に諸組へ配当（大組解体）となる［変遷図⑨］。

慶応元年（一八六五）に鍋島市佑保脩組は、鍋島監物資智組（鍋島播磨組を引き継ぐ）に合併する［変遷図④］。鍋島市佑は、慶応二年（一八六六）に鍋島縫殿助預を引き継ぎ、再び大組頭となる［変遷図⑨］。鍋島市佑組は、元々鍋島周防茂郷（姉川鍋島家）を引き継いだ大組であった［変遷図⑫］。

慶応二年（一八六六）に深江六左衛門組［変遷図⑧］・岡部杢佐組［変遷図⑯］も諸組へ配当となり十一組編制となる。

坂部又右衛門明矩組は、天保十四年（一八四三）から二十六年間一度も組替が行われていない［変遷図⑭］。

この十一組編制は明治二年（一八六九）の藩政改革まで続く。

四、参考史料

幕末期佐賀藩の大組編制は「着到」「諸切米帳」「座席帳」（「鍋島家文庫」鍋島報效会所蔵、佐賀県立図書館寄託）などから窺うことができる。ａの底本にｄからｊの史料を変遷図に追記した。

ｄ『弘化二年巳惣着到』（鍋３３１／６２）【表１】は、大組頭ごとに氏名・石高・役職・住居が記されている。

ｅ『佐賀藩拾六組侍着到』（鍋３３１／９５）【表２】は、大組頭ごとに氏名・石高・役職（幕末期）・職業（明治期）・続柄が記されている。

ｆ『佐賀藩拾五組侍着到』（鍋３３１／５３）【表３】は、大組頭から組頭ごとに氏名・石高が記されている。

ｇ『文久元年諸切米帳』（鍋３３１／９６）【表４】、

ｈ『慶応元年諸切米帳』（鍋３３１／９８）【表４】、

ｉ『慶応二年諸切米帳』（鍋３３１／９７）【表４】は、大組頭ごとに氏名・石高が記されている。

ｊ『座席帳』（３３１／６０）【表５】には、弘化四年（１８４７）から慶応三年（１８６７）までの大組頭が記されている。

二つの「侍着到」ｅ・ｆの年代は共に元治元年（一八六四）と考えられる。ただし大組編制の変遷図からｅは九月廿五日以前でｆは九月二十五日以後といえる。

ｉ『慶応二年諸切米帳』【表４】とｊ『座席帳』の慶応二年【表５】と大組編制が異なる。同じ慶応二年だが変遷図をみると十一月一日をさかいにｉは組替以前、ｊは組替以後であることがわかる。

底本と異本ａ～ｃの『大組頭次第』とｄ～ｊの参考史料は、ほぼ同様の記載内容であることがいえる。

ただし、ｇ文久元年（一八六一）の諸切米帳とｊ座席帳の文久元年には、本史料の『大組頭次第』に記載がない大組頭として鍋島播磨茂快組を引き継いだ「鍋島（または大田）孝五郎」の記載がある。御家老系図（鍋１４１／８）によれば鍋島孝五郎は茂快の子で後の資智のことである。このことから文久二年の前年から引き継いでいたと考えられる［変遷図②］。

五、まとめ

これまで大組編制については『佐賀藩の総合研究』に黒田安雄氏によって一部収載されているが、近世をとおしての大組編制については、具体的に示されてこなかった。このことから明暦期から慶応期までの大組編制の変遷図を『大組頭次第』からよみとり安政期まで作成し、さらにいくつかの相違点はあるが、異本と大組編制に関する参考史料を追記することにより明治元年（一八六八）までの大組編制の変遷を復元し、黒田氏が作成した変遷図を補完することができた。

一般に佐賀藩の大組編制が十五組といわれているが、慶安三年に十五組が揃い、天和期と宝永期に大組編制に変化があり、幕末期に十五組から十六組となり、さらに十五組から十三組となり、十一組で大組が解体していることがこの変遷図からよみとれた。

大組頭の家柄については、家老家・着座家から大組頭を編制しているが、十五組が揃う慶安三年以前の藩政初期は、重臣の成富兵庫茂安、親類家・親類同格家の家柄からも佐賀藩の直轄軍である「与」（大組）を編制していることがわかった。

大組の引き継ぎの特徴は一つに基本的には同じ家が引き継ぐと見られる点で、二つ目に預組が存在する点である。預組には、五年間の長期に預った鍋島弥平左衛門茂體預組から鍋島主水茂親預組のように預組から預組に引き継ぐ異例のケースと預組から正規の大組に引き継ぐ場合と様々なケースがあり複雑である。

これらの預組は、一時的な組ではなく正規の大組と同等に機能していたのではないかと考えられる。

今回は資料を紹介する程度で充分な分析ができなかった。今後の課題は、大組と預組が具体的にどのように引き継ぎ、機能していたのか詳細に調査し、明らかにできればと考えている。

【主な参考文献】

佐賀県史編さん委員会『佐賀県史』中巻（近世篇）、一九六八年。
佐賀市史編さん委員会『佐賀市史』第二巻、一九八三年。
藤野保「政治過程および政治形態」黒田安雄「家臣団の編成と構成」藤野保編『佐賀藩の総合研究』吉川弘文館、一九八一年。
高野信治「家臣団の編成と構成」藤野保編『続佐賀藩の総合研究』吉川弘文館、一九八六年。
木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』九州大学出版会、一九九七年。
中野禮四郎『鍋島直正公傳』侯爵鍋島家編纂所、一九二〇年。
『佐賀県近世史料　第一編　第十一巻』佐賀県立図書館、二〇〇二年。『佐賀県近世史料　第八編　第一巻』二〇〇四年。『佐賀県近世史料　第五編　第一巻』二〇〇八年。『佐

賀県近世史料　第二編　第一巻』二〇〇九年。

【変遷図の凡例】

一．大組頭名は略さず記載し、創設時と引き継ぎ時の年代を西暦で記し、閏月は［　］を付した。

一．明暦元年から明治元年までを収載した。なお寛永期～明暦期までは、黒田安雄氏が変遷図を作成し、『佐賀藩の総合研究』（吉川弘文館）に収載されている。

一．大組の引き継ぎが不詳の場合は、大組頭に（　）を付して区別し、想定される時期に示した。

一．異本の追記分は、□で囲み、実線矢印で表した。

一．参考史料の追記分は、網掛にし、点線矢印で表した。

一．大組頭の底本の記載順に①～⑯の番号を付した。

一．備考には、参考のため略年表と【表1】～【表5】の史料の作成年代と対応させるために変遷図に付した。

【付記】

本稿を作成するにあたり、史料閲覧、掲載許可を下され、格別の便宜をはかってくださいました財団法人鍋島報效会、ならびにその他多数の方々からご教示いただきました。心よりお礼申し上げます。

（佐賀県立図書館近世資料編さん室）

表1

	弘化二年（1845）　弘化二年巳総着到上下　鍋331/62					
	大　組	氏　名	石高（物成）	役　職	住　居	
1	弥平左衛門組私着到	鍋島弥平左衛門	2250	大与頭	北御堀端	御側組
2	播磨組私着到	鍋島播磨	1700	大与頭	中ノ小路	御側組
3	隼人組私着到	鍋島隼人	270	大与頭	御城内	御側組
4	市佑組私着到	鍋島市佑	600	大与頭	北御堀端	御側組
5	主水組私着到	鍋島主水	3000	大与頭	御城内	先手組
6	孫六郎組私着到	鍋島孫六郎	2400	大与頭	御城内	先手組
7	杢之助組私着到	岡部杢之助	500	大与頭	中ノ小路	警固組
8	主計組私着到	大木主計	310	大与頭	十間端	警固組
9	志摩組私着到	鍋島志摩	1900	大与頭	松原小路	警固組
10	六左衛門組私着到	深江六左衛門	300	大与頭	片田江小路	警固組
11	周防組私着到	鍋島周防	2020.5	大与頭	御城内	警固組
12	左太夫組私着到	鍋島左太夫	600	大与頭	中ノ小路	警固組
13	又右衛門組私着到	坂部又右衛門	400	大与頭	西御堀端	留守居組
14	勘解由組私着到	石井勘解由	500	大与頭	中ノ小路	留守居組
15	十右衛門組私着到	成冨十右衛門	600	大与頭	北御堀端	留守居組

表2

	元治元年（1864）　佐賀藩拾六組侍着到　鍋331/95						
	大　組	氏　名	石高（物成）	続柄	役職（幕末）	職業（明治）	
1	誠吉郎組私着到	鍋島誠吉郎	2205石	—	大組頭	—	御側組
2	監物組私着到	鍋島監物	1700石	—	大組頭	—	御側組
3	隼人組私着到	鍋島隼人	3700石	—	大組頭	—	御側組
4	市佑組私着到	鍋島市佑	600石	—	御年寄	—	御側組
5	志摩組私着到	鍋島志摩	1900石	—	大組頭	—	御側組
6	鷹之助組私着到	鍋島鷹之助	3000石	—	大組頭　前髪立	—	先手組
7	左馬助組着到			—		—	先手組
8	六左衛門私組	深江六左衛門	300石	—	大組頭	—	警固組
9	千之丞組私着到	鍋島千之丞	900石	—	大組頭	—	警固組
10	縫殿組私着到	多久縫殿	200石	—	大組頭	—	警固組
11	大右衛門組私着到	原田大右衛門	250石	—	大組頭　請役所相談役	—	警固組
12	縫殿助組私着到	鍋島縫殿助	2020石5斗	—	大組頭	—	警固組
13	縫殿助預組			—		—	警固組
14	又右衛門組私着到	坂部又右衛門	400石	—	大組頭	—	留守居組
15	左近組私着到	石井左近	500石	—	大組頭	—	留守居組
16	杢左組私着到	岡部杢左	500石	—	大組頭	—	留守居組

表3

	〔元治元年（1864）〕 佐賀藩拾五組侍着到 鍋331/53
1	鍋島誠吉郎組
2	鍋島監物組
3	鍋島隼人組
4	鍋島市佑組
5	鍋島志摩組
6	鍋島鷹之助組
7	鍋島左馬助組
8	深江六左衛門組
9	多久縫殿組
10	原田大右衛門組
11	鍋島縫殿助組
12	鍋島縫殿助預組
13	坂部又右衛門組
14	石井左近組
15	岡部杢左組

表4

	文久元年（1861） 諸切米帳　鍋331/96	慶応元年（1865） 諸切米帳　鍋331/98	慶応二（1866） 諸切米帳　鍋331/97
1	鍋島弥平左衛門組	鍋島誠吉郎組	鍋島孫四郎組
2	**大田孝五郎組**	鍋島監物組	鍋島監物組
3	鍋島隼人組	鍋島隼人組（→誠吉郎組へ）	
4	鍋島市佑組	鍋島市佑組（→監物組へ）	
5	鍋島志摩組	鍋島志摩組	鍋島志摩組
6	鍋島鷹之助組	鍋島鷹之助組	鍋島鷹之助組
7	鍋島左馬助組	鍋島左馬助組	鍋島左馬助組
8	深江六左衛門組	深江六左衛門組	深江六郎左衛門組
9	鍋島千之丞組	鍋島千之丞組（此組省く）	
10	多久縫殿組	多久縫殿組	多久縫殿組
11	原田大右衛門組	原田大右衛門組	原田大右衛門組
12	鍋島周防組	鍋島縫殿助組	鍋島縫殿助組
13	鍋島皐之助組	鍋島縫殿助預組	鍋島縫殿助預組
14	坂部又右衛門組	坂部又右衛門組	坂部又右衛門組
15	石井勘解由組	石井左近	石井左近組
16	岡部杢佐組	岡部杢佐組	岡部杢佐組
組数	16組	16組（13組）	13組

表5

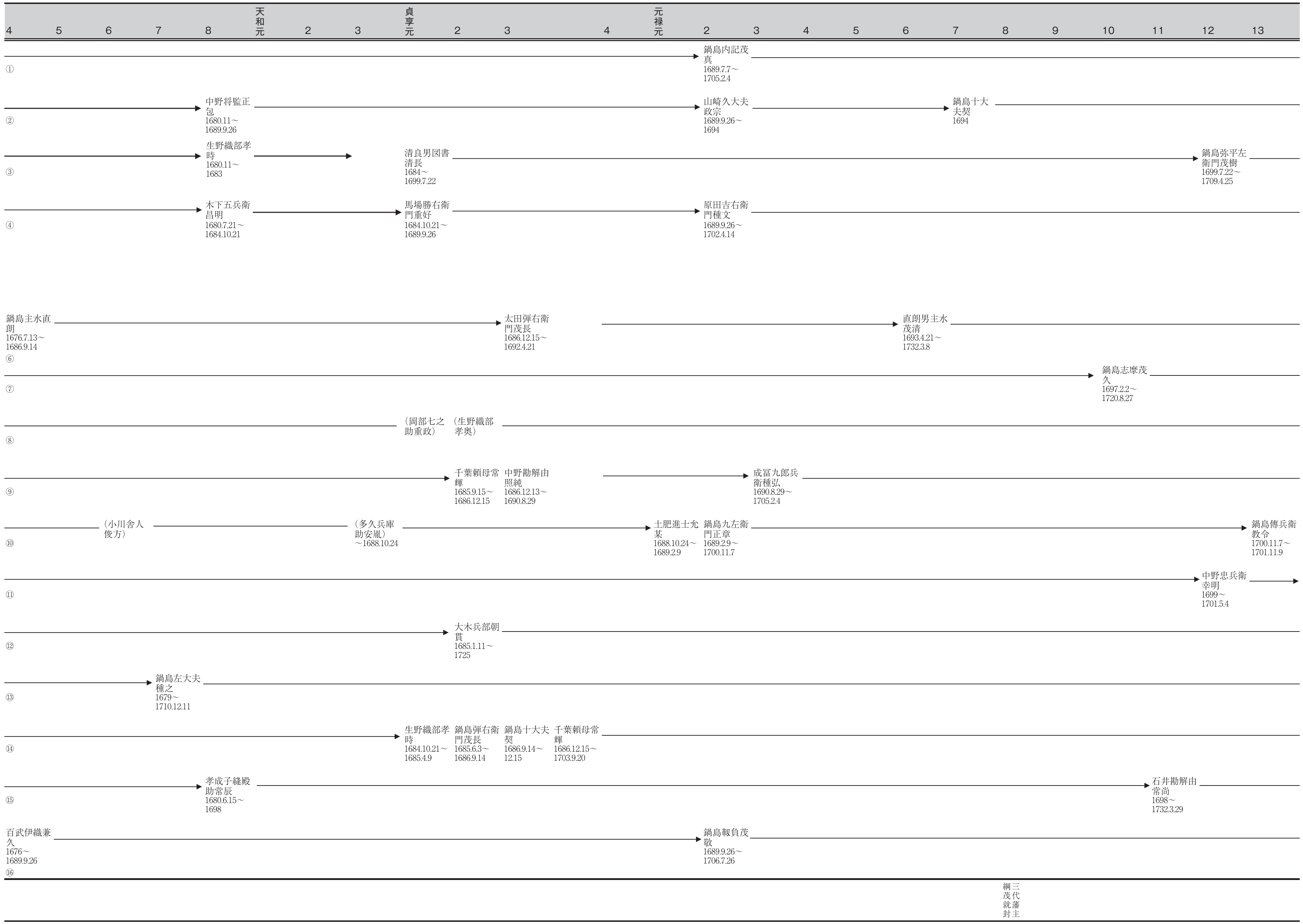
	座席帳　鍋　331/60						
	弘化四年	嘉永元年	嘉永二年	嘉永三年	嘉永四年	嘉永五年	嘉永六年
	1847	1848	1849	1850	1851	1852	1853
1	鍋島弥平左衛門	→	→	→	→	→	→
2	鍋島播磨	→	→	→	→	→	→
3	鍋島隼人	→	→	→	→	→	小山平五左衛門
4	鍋島市佑	→	→	→	→	→	→
5	鍋島主水	→	→	→	→	→	→
6	鍋島孫六郎	→	→	鍋島左馬助	→	→	→
7	岡部杢之助	→	→	→	→	中野神右衛門	→
8	大木主計	→	→	→	→	→	→
9	鍋島志摩	→	→	→	→	→	鍋島隼人
10	深江六左衛門	→	→	→	→	→	→
11	鍋島周防	→	→	→	→	→	→
12	鍋島左太夫	→	→	→	→	→	→
13	坂部又右衛門	→	→	→	→	→	→
14	石井勘解由	→	→	→	→	→	→
15	成冨十右衛門	→	→	→	→	岡部杢之助	→
16		→	→	弥平左衛門預鍋島播磨預	→	→	鍋島志摩

	安政元年	安政二年	安政三年	安政四年	安政五年	安政六年	万延元年
	1854	1855	1856	1857	1858	1859	1860
1	鍋島弥平左衛門	→	→	→	→	→	→
2	鍋島播磨	→	→	→	→	→	→
3	**鍋島隼人**	→	→	→	→	→	→
4	鍋島市佑	→	→	→	→	→	→
5	鍋島主水	→	→	→	→	鍋島左馬助預	→
6	鍋島左馬助	→	→	→	→	→	→
7	**深江六左衛門**	→	→	→	→	→	→
8	大木主計	→	→	→	鍋島千之丞	→	→
9	**多久縫殿**	→	→	→	→	→	→
10	**中野神右衛門**	→	→	原田大右衛門	→	→	→
11	鍋島周防	→	→	→	→	→	→
12	鍋島左大夫	→	→	鍋島皐之助	→	→	→
13	坂部又右衛門	→	→	→	→	→	→
14	石井勘解由	→	→	→	→	→	→
15	岡部杢之助	多久伊織	→	→	岡部杢佐	→	→
16	鍋島志摩	→	→	→	→	→	→

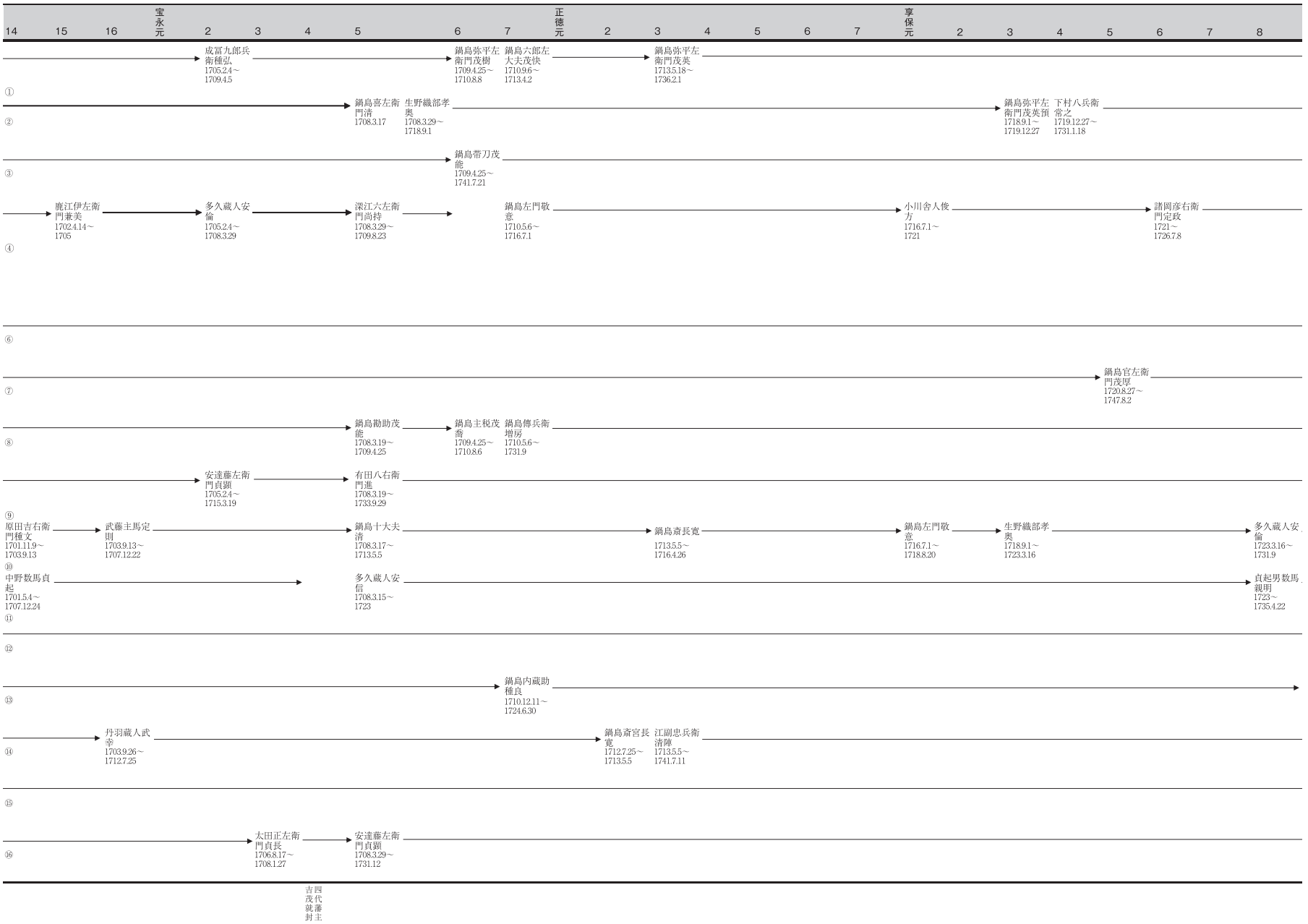
	文久元年	文久二年	文久三年	元治元年	慶応元年	慶応二年	慶応三年
	1861	1862	1863	1864	1865	1866	1867
1	鍋島弥平左衛門	→	鍋島誠吉郎	→	→	鍋島孫四郎	→
2	**鍋島孝五郎**	→	鍋島監物	→	→	→	→
3	鍋島隼人	→	→	→			
4	鍋島市佑	→	→	→	→		
5	**鍋島鷹之助**	→	→	→	→	→	→
6	鍋島左馬助	→	→	→	→	→	→
7	深江六左衛門	→	→	→	→		
8	鍋島千之丞	→	→	鍋島隼人			
9	多久縫殿	→	→	→	→	鍋島縫殿助	→
10	原田大右衛門	→	→	→	→	鍋島安芸預	鍋島安芸
11	鍋島周防	鍋島縫殿助	→	→	多久縫殿	鍋島伊豆預	鍋島伊豆
12	鍋島皐之助	鍋島縫殿助預	→	→	→	鍋島市佑	→
13	坂部又右衛門	→	→	→	→	→	→
14	石井勘解由	→	→	石井左近	→	→	→
15	**岡部杢助**	岡部杢佐	→	→	→		
16	鍋島志摩	→	→	→	→	→	鍋島大隅
組数	16組	16組	16組	15組	13組	11組	11組

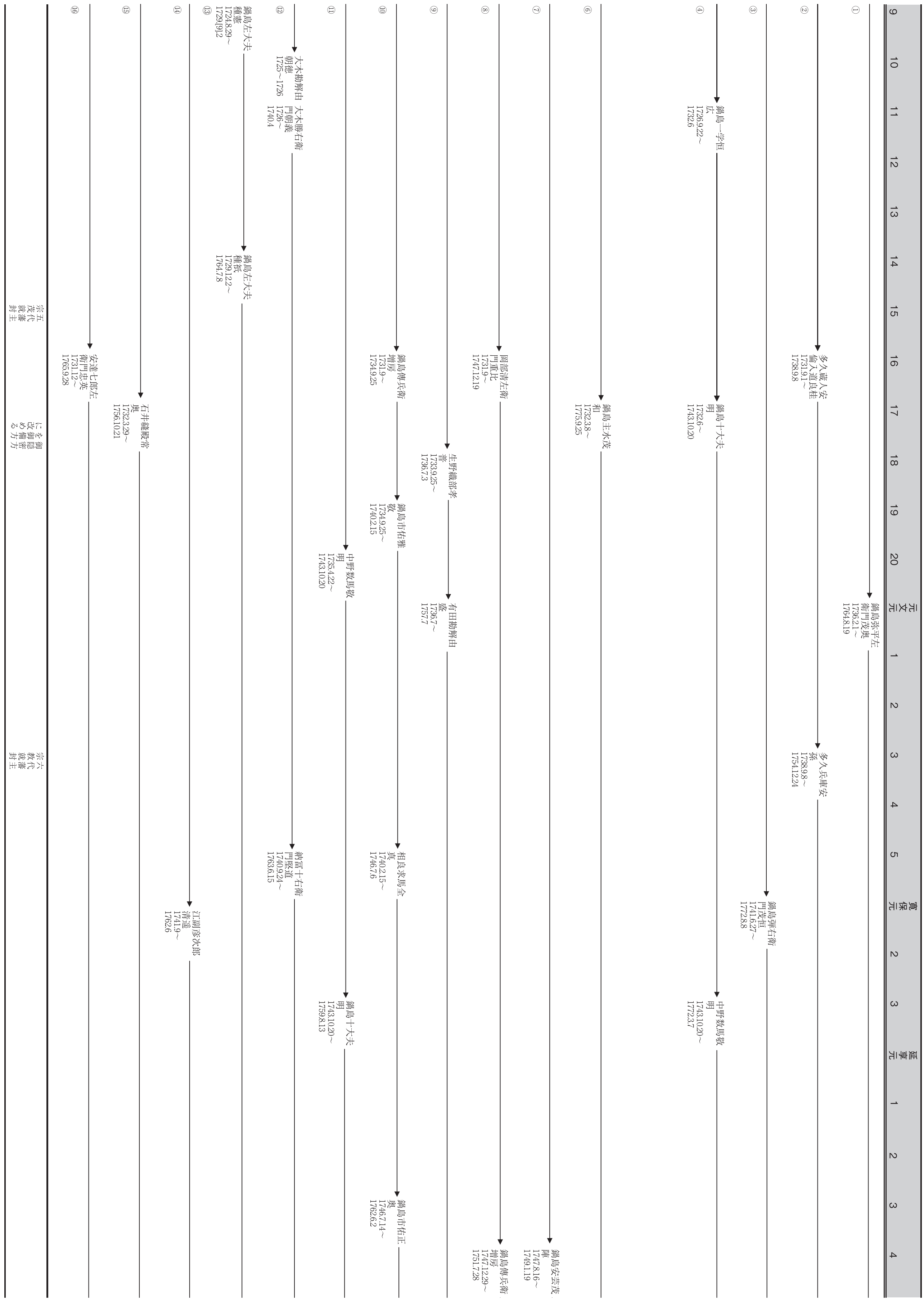
	明治元年
	1868
1	鍋島孫四郎
2	鍋島監物
3	鍋島鷹之助
4	**鍋島孫六郎**
5	**鍋島専十郎**
6	鍋島縫殿助
7	鍋島安芸
8	鍋島伊豆
9	鍋島市佑
10	坂部又右衛門
11	石井左近

鍋島家文庫　安政六年『大組頭次第』―明暦期～慶応期佐賀藩大組編制の変遷図―

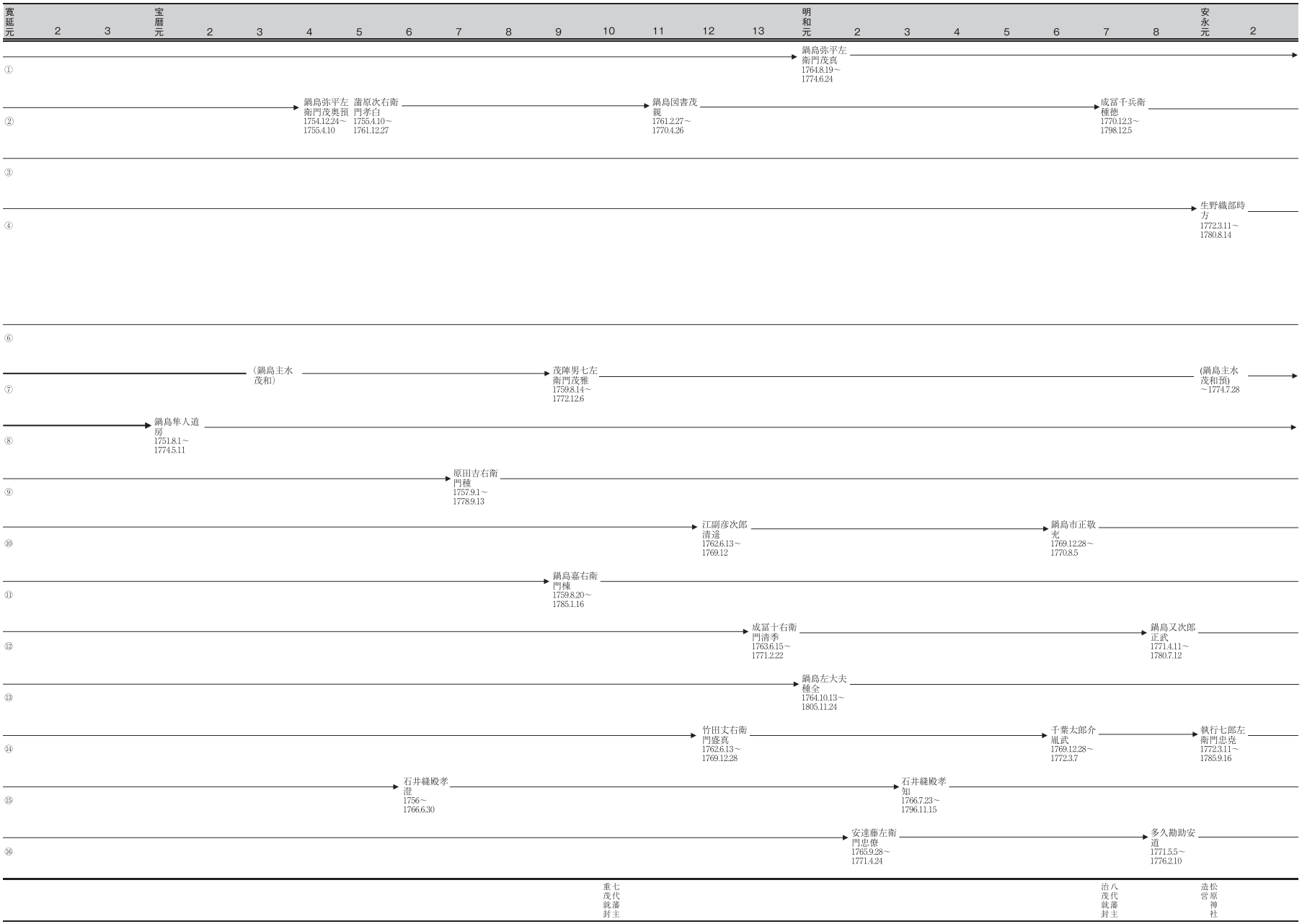

4 5 6 7 8 天和元 2 3 貞享元 2 3 4 元禄元 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13
①
鍋島内記茂真 1689.7.7～1705.2.4
②
中野将監正包 1680.11～1689.9.26
山崎久大夫政宗 1689.9.26～1694
鍋島十大夫契 1694
③
生野織部孝時 1680.11～1683
清良男図書清長 1684～1699.7.22
鍋島弥平左衛門茂樹 1699.7.22～1709.4.25
④
木下五兵衛昌明 1680.7.21～1684.10.21
馬場勝右衛門重好 1684.10.21～1689.9.26
原田吉右衛門種文 1689.9.26～1702.4.14
⑥
鍋島主水直朗 1676.7.13～1686.9.14
太田弾右衛門茂長 1686.12.15～1692.4.21
直朗男主水茂清 1693.4.21～1732.3.8
⑦
鍋島志摩茂久 1697.2.2～1720.8.27
⑧
（岡部七之助重政）
（生野織部孝奥）
⑨
千葉頼母常輝 1685.9.15～1686.12.15
中野勘解由照純 1686.12.13～1690.8.29
成冨九郎兵衛種弘 1690.8.29～1705.2.4
⑩
（小川舎人俊方）
（多久兵庫助安胤）～1688.10.24
土肥進士允茉 1688.10.24～1689.2.9
鍋島九左衛門正章 1689.2.9～1700.11.7
鍋島傳兵衛教令 1700.11.7～1701.11.9
⑪
中野忠兵衛幸明 1699～1701.5.4
⑫
大木兵部朝貫 1685.1.11～1725
⑬
鍋島左大夫種之 1679～1710.12.11
⑭
生野織部孝時 1684.10.21～1685.4.9
鍋島弾右衛門茂長 1685.6.3～1686.9.14
鍋島十大夫契 1686.9.14～12.15
千葉頼母常輝 1686.12.15～1703.9.20
⑮
孝成子縫殿助常辰 1680.6.15～1698
石井勘解由常尚 1698～1732.3.29
⑯
百武伊織兼久 1676～1689.9.26
鍋島靫負茂敬 1689.9.26～1706.7.26
綱茂 三代藩主就封

中野正裕


14
15
16
宝永元
2
3
4
5
6
7
正徳元
2
3
4
5
6
7
享保元
2
3
4
5
6
7
8
①
②
③
④
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮
⑯
成冨九郎兵衛種弘 1705.2.4～1709.4.5
鍋島弥平左衛門茂樹 1709.4.25～1710.8.8
鍋島六郎左大夫茂快 1710.9.6～1713.4.2
鍋島弥平左衛門茂英 1713.5.18～1736.2.1
鍋島喜左衛門清 1708.3.17
生野織部孝奥 1708.3.29～1718.9.1
鍋島弥平左衛門茂英預 1718.9.1～1719.12.27
下村八兵衛常之 1719.12.27～1731.1.18
鍋島帯刀茂能 1709.4.25～1741.7.21
鹿江伊左衛門兼美 1702.4.14～1705
多久藏人安倫 1705.2.4～1708.3.29
深江六左衛門尚持 1708.3.29～1709.8.23
鍋島左門敬意 1710.5.6～1716.7.1
小川舎人俊方 1716.7.1～1721
諸岡彦右衛門定政 1721～1726.7.8
鍋島官左衛門茂厚 1720.8.27～1747.8.2
鍋島勘助茂能 1708.3.19～1709.4.25
鍋島主税茂喬 1709.4.25～1710.8.6
鍋島傳兵衛増房 1710.5.6～1731.9
安達藤左衛門貞顕 1705.2.4～1715.3.19
有田八右衛門進 1708.3.19～1733.9.29
原田吉右衛門種文 1701.11.9～1703.9.13
武藤主馬定則 1703.9.13～1707.12.22
鍋島十大夫清 1708.3.17～1713.5.5
鍋島斎長寛 1713.5.5～1716.4.26
鍋島左門敬意 1716.7.1～1718.8.20
生野織部孝奥 1718.9.1～1723.3.16
多久藏人安倫 1723.3.16～1731.9
中野数馬貞起 1701.5.4～1707.12.24
多久藏人安信 1708.3.15～1723
貞起男数馬親明 1723～1735.4.22
鍋島内藏助種良 1710.12.11～1724.6.30
丹羽藏人武幸 1703.9.26～1712.7.25
鍋島斎宮長寛 1712.7.25～1713.5.5
江副忠兵衛清陣 1713.5.5～1741.7.11
太田正左衛門貞長 1706.8.17～1708.1.27
安達藤左衛門貞顕 1708.3.29～1731.12
吉茂就藩
四代
封主


9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
元文元
1
2
3
4
5
寛保元
2
3
延享元
1
2
3
4
①
鍋島弥平左衛門茂輿 1736.2.1～1764.8.19
②
多久蔵人安倫入道良桂 1731.9.1～1738.9.8
多久兵庫安孫 1738.9.8～1754.12.24
③
鍋島弾右衛門茂恒 1741.6.27～1772.8.8
④
鍋島一学恒広 1726.9.22～1732.6
鍋島十大夫明 1732.6～1743.10.20
中野数馬敬明 1743.10.20～1772.3.7
⑤
⑥
鍋島主水茂和 1732.3.8～1775.9.25
⑦
鍋島安芸茂陣 1747.8.16～1749.1.19
⑧
岡部清左衛門重比 1731.9～1747.12.19
鍋島傳兵衛増房 1747.12.29～1751.7.28
⑨
生野織部孝普 1733.9.25～1736.7.3
有田勘解由盛 1736.7～1757.7
⑩
鍋島傳兵衛増房 1731.9～1734.9.25
鍋島市佑雅敬 1734.9.25～1740.2.15
相良求馬全真 1740.2.15～1746.7.6
鍋島市佑正輿 1746.7.14～1762.6.2
⑪
中野数馬敬明 1735.4.22～1743.10.20
鍋島十大夫明 1743.10.20～1759.8.13
⑫
大木勘解由朝徳 1725～1726
大木勝右衛門朝義 1726～1740.4
納富十右衛門堅道 1740.9.24～1763.6.15
⑬
鍋島左大夫種憲 1724.8.29～1729.閏9.2
鍋島左大夫種祇 1729.12.2～1764.7.8
⑭
江副彦次郎清遥 1741.9～1762.6
⑮
石井縫殿常奥 1732.3.29～1756.10.21
⑯
安達七郎左衛門忠英 1731.12～1765.9.28
宗茂 五代就藩封主
にを御改め備る方 隠密方
宗教 六代就藩封主

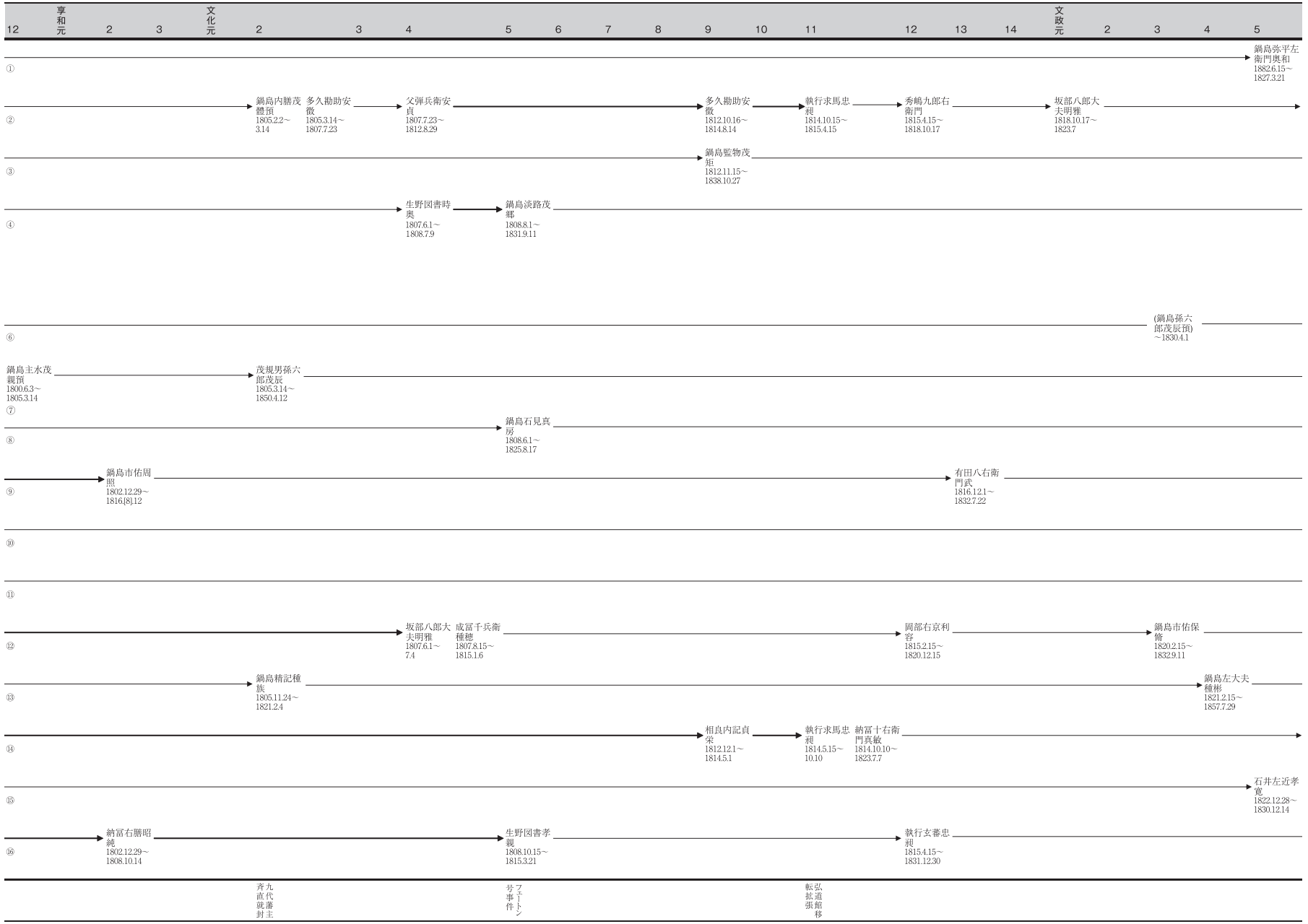
中野正裕

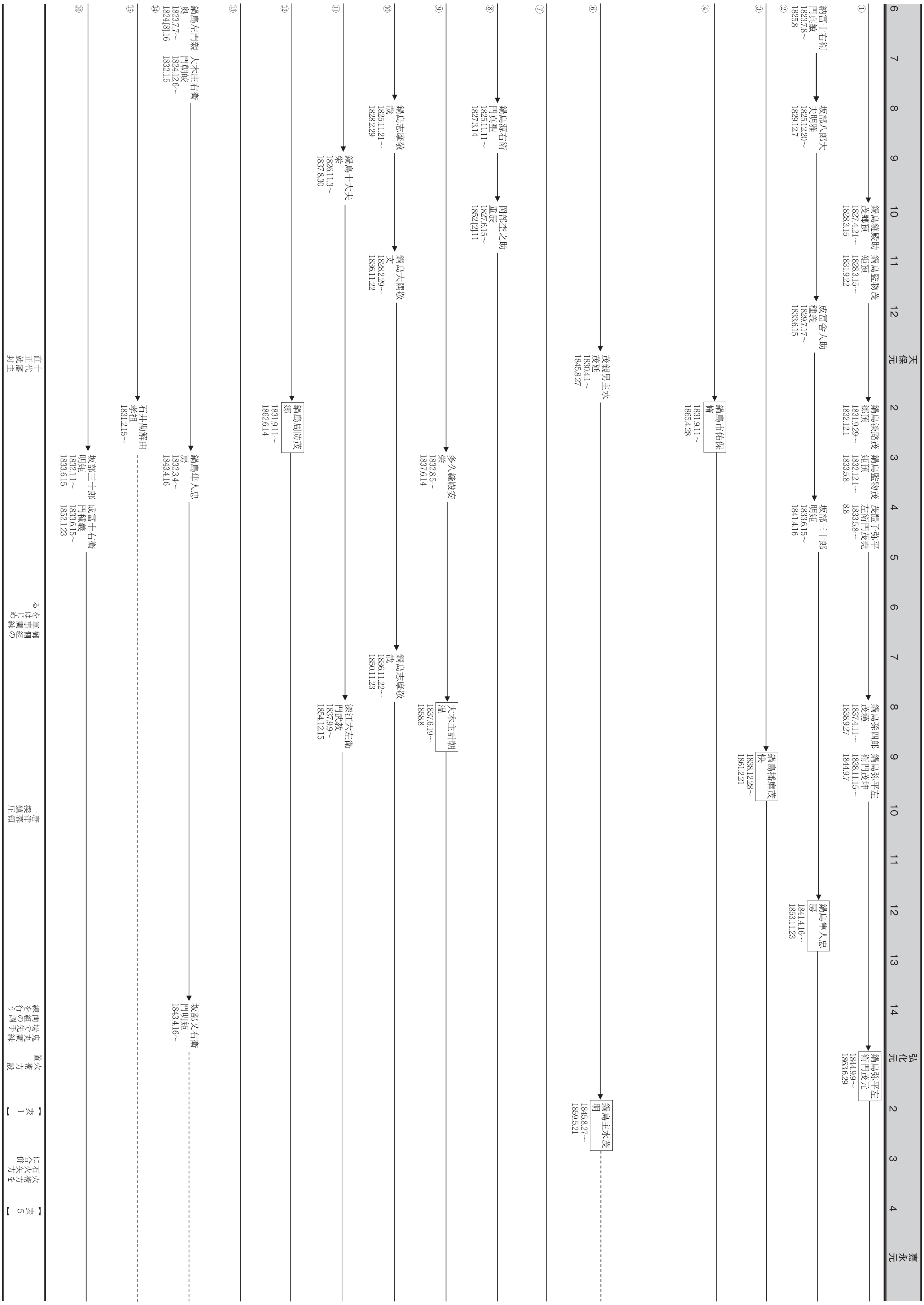

寛延元
2
3
宝暦元
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
明和元
2
3
4
5
6
7
8
安永元
2
①
鍋島弥平左衛門茂真
1764.8.19～
1774.6.24
②
鍋島弥平左衛門茂輿預
1754.12.24～
1755.4.10
蒲原次右衛門孝白
1755.4.10～
1761.12.27
鍋島図書茂親
1761.2.27～
1770.4.26
成冨千兵衛種徳
1770.12.3～
1798.12.5
③
④
生野織部時方
1772.3.11～
1780.8.14
⑥
⑦
(鍋島主水茂和)
茂陣男七左衛門茂雅
1759.8.14～
1772.12.6
(鍋島主水茂和預)
～1774.7.28
⑧
鍋島隼人道房
1751.8.1～
1774.5.11
⑨
原田吉右衛門種
1757.9.1～
1778.9.13
⑩
江副彦次郎清遥
1762.6.13～
1769.12
鍋島市正敬充
1769.12.28～
1770.8.5
⑪
鍋島嘉右衛門棟
1759.8.20～
1785.1.16
⑫
成冨十右衛門清季
1763.6.15～
1771.2.22
鍋島又次郎正武
1771.4.11～
1780.7.12
⑬
鍋島左大夫種全
1764.10.13～
1805.11.24
⑭
竹田丈右衛門盛真
1762.6.13～
1769.12.28
千葉太郎介胤武
1769.12.28～
1772.3.7
執行七郎左衛門忠尭
1772.3.11～
1785.9.16
⑮
石井縫殿孝澄
1756～
1766.6.30
石井縫殿孝知
1766.7.23～
1796.11.15
⑯
安達藤左衛門忠僚
1765.9.28～
1771.4.24
多久勘助安道
1771.5.5～
1776.2.10
七代就藩封主
重茂
八代就藩封主
治茂
松原神社造営

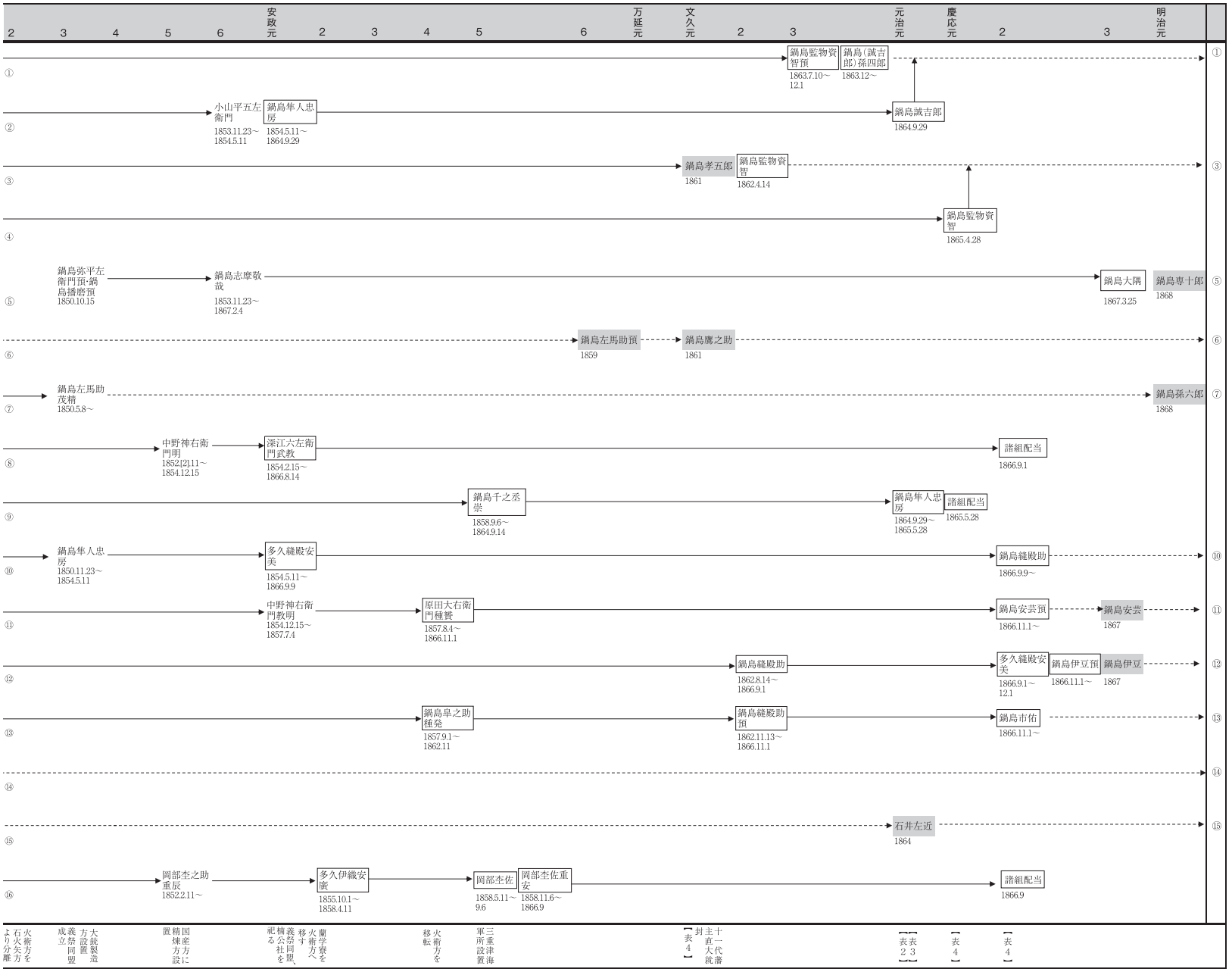
年次（横軸）：安永3・4・5・6・7・8・9・天明元・2・3・4・5・6・7・8・寛政元・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11

番号	就任者（任期）
①	鍋島弾右衛門茂恒預 1774.7.25～1777.5.29 → 茂真子弥平左衛門茂體 1777.6.1～1808.4.12
②	→ 相良権大夫貞栄 1798.12.15～1805.12.5
③	→ 鍋島弾右衛門茂保 1780.11.15～1812.9.30
④	→ 鍋島主税茂徂 1780.8.15～1807.5.22
⑥	→ 鍋島主水茂親 1775.9.25～1820.10.8
⑦	鍋島靫負敬允預 1774.7.23～1775.12.15 / 鍋島主水茂親預 1775.12.25～1780.4.16 → 鍋島弥平左衛門茂體預 1780.4.17～1781.5.15 / 鍋島主水茂親預 1781.5.15～1784.1.15 → 茂雅男淡路茂矩 1784.1.15～1800.5.22 →
⑧	鍋島傳兵衛親房 1774.6.11～1808.6.24
⑨	→ 納富十右衛門昭純 1778.9.15～1787.7.11 → 大木勝右衛門朝恒 1787.8.1～1802.12.12
⑩	→ 深堀頼母堅澄 1787.9.1～1788.8.5 / 鍋島大隅敬文 1788.9.1～1811.8.13
⑪	→ 伊東杢兵衛祐寿 1785.2.15～1790.12.7 → 坂部次郎左衛門慶明 1790.12.15～1794.8.25 → 鍋島十大夫繁 1794.9.9～1826.10.17
⑫	→ 生野織部時方 1780.10.3～1787.3.16 → 生野図書時奥 1787.6.1～1807.6.1
⑬	
⑭	→ 執行主計忠尚 1785.12.23～1812.10.23
⑮	→ 石井勘解由孝起 1796.11.15～1822.12.28
⑯	→ 多久弾右衛門安貞 1776.2.10～1791.10.27 → 鍋島市佑周熙 1791.10.27～1802.12.29

天明元：藩校弘道館建設
天明3：徒罪方設置
寛政10：町方役所設置


12
享和元
2
3
文化元
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
文政元
2
3
4
5
①
鍋島弥平左衛門奥和
1882.6.15～
1827.3.21
②
鍋島内膳茂體預
1805.2.2～
3.14
多久勘助安徴
1805.3.14～
1807.7.23
父弾兵衛安貞
1807.7.23～
1812.8.29
多久勘助安徴
1812.10.16～
1814.8.14
執行求馬忠昶
1814.10.15～
1815.4.15
秀鶴九郎右衛門
1815.4.15～
1818.10.17
坂部八郎大夫明雅
1818.10.17～
1823.7
③
鍋島監物茂矩
1812.11.15～
1838.10.27
④
生野図書時奥
1807.6.1～
1808.7.9
鍋島淡路茂郷
1808.8.1～
1831.9.11
⑥
(鍋島孫六郎茂辰預)
～1830.4.1
⑦
鍋島主水茂親預
1800.6.3～
1805.3.14
茂規男孫六郎茂辰
1805.3.14～
1850.4.12
⑧
鍋島石見真房
1808.6.1～
1825.8.17
⑨
鍋島市佑周照
1802.12.29～
1816.[8].12
有田八右衛門武
1816.12.1～
1832.7.22
⑩
⑪
⑫
坂部八郎大夫明雅
1807.6.1～
7.4
成冨千兵衛種穂
1807.8.15～
1815.1.6
岡部右京利容
1815.2.15～
1820.12.15
鍋島市佑保脩
1820.2.15～
1832.9.11
⑬
鍋島精記種族
1805.11.24～
1821.2.4
鍋島左大夫種彬
1821.2.15～
1857.7.29
⑭
相良内記貞栄
1812.12.1～
1814.5.1
執行求馬忠昶
1814.5.15～
10.10
納冨十右衛門真敏
1814.10.10～
1823.7.7
⑮
石井左近孝寛
1822.12.28～
1830.12.14
⑯
納冨右膳昭純
1802.12.29～
1808.10.14
生野図書孝親
1808.10.15～
1815.3.21
執行玄蕃忠昶
1815.4.15～
1831.12.30
斉直就封
九代藩主
フェートン号事件
弘化転居
拡張移転


6 7 8 9 10 11 12 天保元 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 弘化元 2 3 4 嘉永元
①
鍋島縫殿助茂郷預 1827.4.21～1828.3.15
鍋島監物茂矩預 1828.3.15～1831.9.22
鍋島淡路茂郷預 1831.9.29～1832.12.1
鍋島監物茂矩預 1832.12.1～1833.5.8
茂體子弥平左衛門茂堯 1833.5.8～8.8
鍋島孫四郎茂燕 1837.4.11～1838.9.27
鍋島弥平左衛門茂坤 1838.11.15～1844.9.7
鍋島弥平左衛門茂元 1844.9.9～1863.6.29
②
納冨十右衛門真敏 1823.7.8～1825.8
坂部八郎大夫明雅 1825.12.20～1829.12.7
成冨舎人助種義 1829.7.17～1833.6.15
坂部三十郎明矩 1833.6.15～1841.4.16
鍋島隼人忠房 1841.4.16～1853.11.23
③
鍋島播磨茂快 1838.12.28～1861.2.21
④
鍋島市佑保脩 1831.9.11～1865.4.28
⑥
茂親男主水茂延 1830.4.1～1845.8.27
鍋島主水茂明 1845.8.27～1859.5.21
⑦
⑧
鍋島源右衛門真聖 1825.11.11～1827.3.14
岡部杢之助重辰 1827.6.15～1852.[2].11
⑨
多久縫殿安栄 1832.8.5～1837.6.14
大木主計朝温 1837.6.19～1858.8
⑩
鍋島志摩敬哉 1825.11.21～1828.2.29
鍋島大隅敬文 1828.2.29～1836.11.22
鍋島志摩敬哉 1836.11.22～1850.11.23
⑪
鍋島十大夫栄 1826.11.3～1837.8.30
深江六左衛門武教 1837.9.9～1854.12.15
⑫
鍋島周防茂郷 1831.9.11～1862.6.14
⑬
⑭
鍋島左門親奥 1823.7.7～1824.[8].16
大木庄右衛門朝皎 1824.12.6～1832.1.5
鍋島隼人忠房 1832.3.4～1843.4.16
坂部又右衛門明矩 1843.4.16～
⑮
石井勘解由孝祖 1831.2.15～
⑯
坂部三十郎明矩 1832.1.1～1833.6.15
成冨十右衛門種義 1833.6.15～1852.1.23
直正十代藩主就封
御側組の軍事調練をはじめる
唐津藩領一揆鎮圧
火術方設置
鬼丸調練場で先手両組の調練を行う
【表1】
火術方を石火矢方に合併
【表5】


2 3 4 5 6 安政元 2 3 4 5 6 万延元 文久元 2 3 元治元 慶応元 2 3 明治元
①
鍋島監物資智預
1863.7.10～12.1
鍋島(誠吉郎)孫四郎
1863.12～
②
小山平五左衛門
1853.11.23～1854.5.11
鍋島隼人忠房
1854.5.11～1864.9.29
鍋島誠吉郎
1864.9.29
③
鍋島孝五郎
1861
鍋島監物資智
1862.4.14
④
鍋島監物資智
1865.4.28
⑤
鍋島弥平左衛門預・鍋島播磨預
1850.10.15
鍋島志摩敬哉
1853.11.23～1867.2.4
鍋島大隅
1867.3.25
鍋島専十郎
1868
⑥
鍋島左馬助預
1859
鍋島鷹之助
1861
⑦
鍋島左馬助茂精
1850.5.8～
鍋島孫六郎
1868
⑧
中野神右衛門明
1852[2].11～1854.12.15
深江六左衛門武教
1854.2.15～1866.8.14
諸組配当
1866.9.1
⑨
鍋島千之丞崇
1858.9.6～1864.9.14
鍋島隼人忠房
1864.9.29～1865.5.28
諸組配当
1865.5.28
⑩
鍋島隼人忠房
1850.11.23～1854.5.11
多久縫殿安美
1854.5.11～1866.9.9
鍋島縫殿助
1866.9.9～
⑪
中野神右衛門教明
1854.12.15～1857.7.4
原田大右衛門種誉
1857.8.4～1866.11.1
鍋島安芸預
1866.11.1～
鍋島安芸
1867
⑫
鍋島縫殿助
1862.8.14～1866.9.1
多久縫殿安美
1866.9.1～12.1
鍋島伊豆預
1866.11.1～
鍋島伊豆
1867
⑬
鍋島皐之助種発
1857.9.1～1862.11
鍋島縫殿助預
1862.11.13～1866.11.1
鍋島市佑
1866.11.1～
⑭
⑮
石井左近
1864
⑯
岡部杢之助重辰
1852.2.11～
多久伊織安寛
1855.10.1～1858.4.11
岡部杢佐
1858.5.11～9.6
岡部杢佐重安
1858.11.6～1866.9
諸組配当
1866.9
火術方を石火矢方より分離
大銃製造方設置
国産精煉方設置に
義祭同盟成立
義祭同盟、楠公社を祀る
蘭学寮を火術方へ移す
火術方を移転
三重津海軍所設置
【表4】
十一代主直封大名落
【表2】【表3】
【表4】
【表4】